

受験生の皆さんに
“さくらの花”が咲きますよう
エールを送ります



創刊昭和55年5月5日
第418号
【通巻419号】

発行所
まんにちはち
418こちら情報部
〒418-0063
富士宮市若の宮町140(きうちいんさつ内)
TEL 0544 24-1515
E-mail: printkiuchi@space.ocn.ne.jp
印刷所
株式会社 きうちいんさつ

次号は
4月5日の発行です。
発行数 14,500部



こんな事あんな事 テロ 雑感

冬休みが終わり、学校が始まった。図書室は入試や校内の定期テストの関係で多くの生徒で賑わう。
そんな中、ある生徒が、先生、イスラム国って、どこにあるんですか、「テストに出るの」「そうじゃないんです、地図に載ってないので……」

を考えると自分がいた。国内に眼を移すと、殺人事件が頻りに起こっている。同棲相手の男性を二十八才の女性が殺す。九十三才の老女が強盗殺人に遭う。交際相手の女性を殺す。今年ではないが、秋葉原の無差別殺傷事件、今でも裁判中のオウム事件。記憶に新しいのが二月の小学五年男児が刺殺等、新聞、ニュースには毎日のように、殺人という文字が踊っている。日本にも広い意味でテロが発生しているようなものだ。国際社会になつているとは言え、こんな日本では恥ずかしい。平和な日本が帰ってくるのは、何時なんだろうか。



望月 勝

山本武正(羽鮒)

私が子供の頃はまだ新幹線も東名高速もなかった。東京に行くのはちよつとした旅行であつた。だから出掛ける前の数日間、富士宮から身延線(当時は今とは違う所を走つてた。)に乗り、富士で東海道線に乗り換えて何時間もかけて東京にたどり着くわけだが、その道中が旅の醍醐味であつた。いつも母親にねだつて冷凍ミカンや陶器に入つたお茶や駅弁を買つてもらつた。当時の駅弁は今考えると、たいしたものが入つていなかった気がするが、それでも我々子供たちは夢中になつて車窓からの風景を楽しみながら食べたものであつた。今は全国の駅弁がかなり簡単に手に入るようになったが、やはり駅弁は電車の中で食べる方が美味しいと感じるのは私だけであるのか?こんな事を考えてくれた焼売弁当を食べている。

角田 猛夫

田貫湖ふれあい自然塾 自然塾のプログラム

- ①日替わり無料プログラム 季節の自然さんぽ 毎週水曜日～日曜日 14:00～14:30
 - ②冬ならではの 水鳥ウォッチング 1月10日～3月13日 (3月中旬までの限定企画!) 日曜・祝日・自然塾休館日を除く 15:30～16:15
 - ③富士山洞くつ探検 22日 13:15～16:00 3月22日 9:45～12:30
 - ④たぬき湖なぞとき探偵事務所 随時実施中!
 - ⑤オリジナルマイバック作り 随時実施中!
 - ⑥木のペンダント作り 随時実施中!
- 詳細・ご予約はTELにてお問合せ下さい。
TEL (0544) 54-5410
これらのプログラムはホームページ上でも見ることができます。
こちらから <http://www.tanuki-ko.gr.jp/tanukiko/special>

静岡県立朝霧野外活動センター

おやこで星を見よう～プラネタリウム一般開放～
～春の星と、おひつじ座について～
家族で秋の夜空を楽しもう☆
【日時】15日(日)
1部 13:15～受付 13:30～14:30上映
2部 15:00～受付 15:15～16:15上映
【場所】静岡県立朝霧野外活動センター
【対象】ご家族など一般の方
【参加費】無料
【定員】各回90名(要予約)
【申込方法】お電話にてご予約ください。
申込方法、料金等については朝霧野外活動センターまでお問い合わせください。
※詳細は後日センターHPにて発表いたします。
TEL:0544-52-0321 HP:<http://asagiri.camping.or.jp/index.html>

垣間みる

少し春らしくなると、まだ枯景色ではあるが、もう、地の底では草の芽が頭をもたげはじめています。――季寄せによれば、早春、大地から草の芽が萌え出ることを「下萌」といい、「草萌」、「草青む」とも言う。
ウオーキングの傍ら、道ばたに、池の辺に、校庭の隅に、林の中に、垣根の下に、いたるところで、そんな気配が感じられる。それは確かな春の動きを思わせるのである。
――「下萌えぬ人間それに従ひぬ」(星野立子)
この句には、父、高浜虚子の評がある。「天地の運行に従つて百草は下萌えをし、生いたち、花をつけ、実を結び枯れる。人も亦天地の運行に従つては生れ生長し老い死する」といつ、やゝかたくなるしいものである。毎年時期が来ると下萌がはじまる。そして、春が必ずやってくるのである。その自然の摂理は、人間でも歪めることは出来ない。(中略) 厳肅な自然に対する人間の存在を、みごとに詠い切つた一句である。
――(石寒太著「俳句日曆」、PHP文庫)
道すがら、垣間より、「隣の花は赤い」(成語林)すなわち、他人のものはなんでも自分のものよりもよく見えて、うらやましく思えること。――そんな、赤い花よりも、四季を彩る、「時々の花」を愛でし、今。
ちなみに、「垣根」は、家や庭の周囲を囲つたものの総称で、「生け垣」といえば植物で垣根を作つたものを言い表すことば。これを竹で作れば「竹垣」で、石で作れば「石垣」等々。垣根を意味する言葉は驚くほどたくさんある。
――(「目でみることは 有頂点」、東京書籍)
いわゆる、「垣間みる」とは、物のすきまからちらちらと見る。ちよつと見ると見ると表現だが、もとより事態や状況の一面だけを見ることを「垣間みる」とも言う。

ハンドルを切れぬ轍や春の泥

KEN

